遠ざかる河口

歴史のドアを開けよう
Natural History 第36回
いしかり博物誌

■文化財・博物館開設準備室　☎0133-72-6123
E-mail:bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp

写真１
石狩灯台

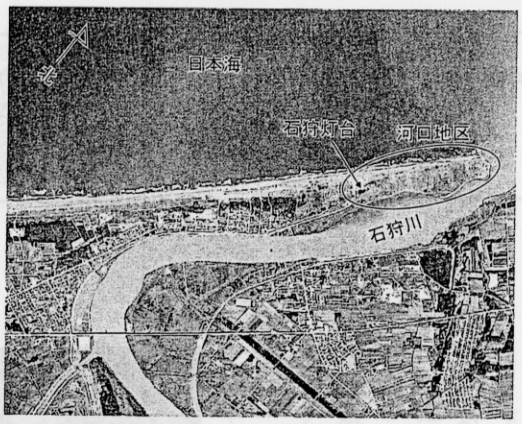


写真２　石狩川河口地区

一八九二（明治二十五）年に運用が開始され、今でも石狩浜のシンボルとなっている石狩灯台（写真１）。その先には、一・五キロにわたってハマナスなどの海浜植物が生い茂る、石狩川河口地区が広がっています。でも、ふつう灯台といえば岬など陸地の先端にあるはず。なぜ石狩ではこんなところにあるのでしょうか。

北海道一の大河、石狩川は、上流から大量の土砂を河口まで運んできます。航空写真を見ると海側の水は青っぽいのに、川側は土砂で黄色く濁っているのがよくわかります（写真２）。河口地区は、このようにして運ばれてきた砂が集まってできた、幅三百メートルほどの細長い陸地なのです。このような地形を砂嘴（さし）といいます。

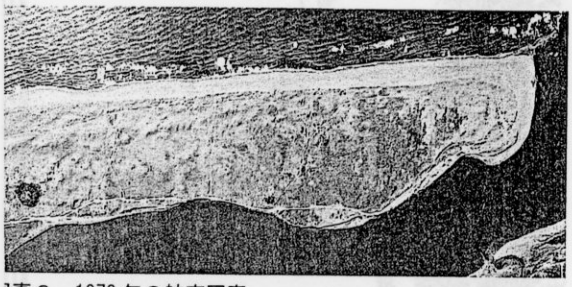


写真３　1978年の航空写真

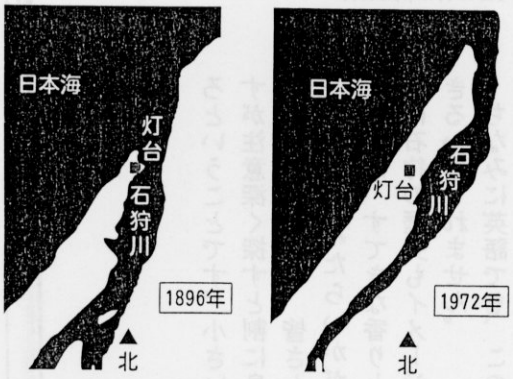
写真４　1995年の航空写真

小石や泥にくらべて、砂は水の流れでさらさらと簡単に移動してしまいます。そのため砂でできた地形はどんどん変化していきます。一九七八年と一九九五年の二枚の航空写真を見比べてみてください（写真３・４）。わずか二十年足らずのうちに、河口地区の先端部（ループ状の道路に注目）や、海側の砂浜が大きく変化しているのがわかると思います。今からほんの二～三年前までは一九九五年の写真のように砂浜がすっかり消えて、緑におおわれた砂丘まで波で削られていましたが、今はまた砂浜が復活しています（写真５）。

写真５　2002年６月の河口

江戸時代の鳥瞰図や明治時代の地形図から、河口地区の砂嘴は今よりも短かったことがわかっています（図）。今から百十年前、完成したばかりの石狩灯台は砂嘴の最先端の地にありました。しかし石狩川が運んでくる砂によって陸地が少しずつ成長し、河口は灯台からどんどん遠ざかっていったのです。当時、新築の灯台のすぐ目の前では、石狩川が日本海に注ぎこんでいたことでしょう。

（志賀健司）



河口地区の砂嘴の変化